応用生態工学会ニュースレター

Ecology and Civil Engineering Society（ECESJ）

No.51

2011（平成 23）年 2 月 18 日（金）発行

〔発行所〕　応用生態工学会事務局　〒102-0083　東京都千代田区麹町 4-7-5　麹町ロイヤルビル 405 号室

TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520　E-mail: eces-manager@ecesj.com　HP：http://www.ecesj.com/

〔発行者〕　応用生態工学会（編集責任者：幹事長　藤田光一，事務局長　仮谷伏竜）

1　はじめに…… 1

2　理事会・幹事会報告 …… 1

3　海外学会派遣者の募集 …… 6

4　行事開催報告…… 7

4.1　沖縄フィールドシンポジウム報告…… 7

4.2　第 3 回　近畿現地 WS in 淀川…… 10

4.3　福岡 －九州の応用生態工学の事例と研究－ 事例発表会 …… 14

4.4　松山活動紹介 多自然川づくり研修会 … 16

5　行事予定……17

5.1　第 3 回　フィールドシンポジウム　in 広島 ‥ 17

5.2　国際交流シンポジウム：生物多様性を意識した河川環境管理 …… 17

6　今後の予定……18

別　紙　年会費納入のお願い（平成 23 年度）
応用生態工学会　会員アンケート

1　はじめに

今回のニュースレターでは，理事会報告の他，例年 5 月に行ってきた海外学会派遣者の募集案内を掲載しています．また，年度明け 4～6 月の現地イベントや国際シンポジウムを案内しています．

別紙として，第 3 次中期計画に基づき作成を進めていく「応用生態工学に関するテキスト（大学～社会人・実務者レベル）」に関するアンケートを同封しておりますので，是非，学会ホームページよりご回答のほどよろしくお願いいたします．

●アンケート回答フォーム

http://www.ecesj.com/FS-APL/FS-Form/form.cgi?Code=3rd_plan

なお，**2011 年度からのニュースレターは，学会ホームページにアップロードした PDF ファイルの URL を，登録頂いたメールアドレスに送信していくこととなります**（第 14 回総会　2011 年度予算に関する決議）．**メールアドレスを変更された方，登録されていない方は，下記よりお知らせください．**

※メールアドレスをお持ちでない会員の方には，引き続き送付いたします．

●会員登録情報変更連絡フォーム

http://www.ecesj.com/FS-APL/FS-Form/form.cgi?Code=change

2　理事会・幹事会報告

2010 年度最後の役員会として，第 46 回幹事会，第 55 回理事会が開催されました．報告事項および審議事項について報告します．

役員会開催状況
第 46 回 幹事会 平成 23 年 1 月 13 日（木） 10:00～12:00
第 55 回 理事会 平成 23 年 2 月 4 日（金） 13:00～15:00

第５５回 理事会

・日時：平成 23 年 2 月 4 日（金）　13:00～15:00
・場所：弘済会館　1 階 葵（西）会議室
・出席：近藤会長，谷田副会長，池淵副会長，井上理事，熊野理事，島谷理事，玉井理事，辻本理事，山本理事，渡辺理事，藤田幹事長 仮谷事務局長，高橋眞彦次長
オブザーバー：間宮監事，渡辺晋監事

1　報告事項

(1)　第 54 回　理事会報告

第54回理事会議事録（平成22年9月24日（金））での審議結果について報告した．

(2) 平成 22 年度報告（会員状況・大会報告・経過報告・決算見込み）

1) 会員状況報告(平成 23 年 2 月 1 日現在)

平成 22 年度（2 月 1 日現在）の会員数は，1,265 名（正：1,163 名，名誉：4 名，学生：98 名）であり，現在，33 法人(49 口)の賛助会員は，22 年度末での退会が 3 法人（4 口），23 年度に入会を検討している法人が 2 法人（2 口）であることを報告した．

2) 第 14 回札幌大会報告

ニュースレター50 号に掲載した札幌大会報告の概要と，大会の収支について報告した．

大会収支は，河川整備基金からの助成と参加費等により約 427 万円の収入となり，対する総支出は約 397 万円と，約 30 万円の黒字となったことを報告した．

また，平成 23 年度の第 15 回大会は，石川県金沢市で開催し，『エコリュージョンを考える－生物多様性と地域の歴史と伝統に基づく流域管理－』をテーマとした公開シンポジウム実施を予定すること，シンポジウムの実施に向けて河川整備基金助成事業へ200 万円の助成申請を行った事を報告した．

3) 平成 22 年度経過報告

経過報告として，当該年度の学会・地域研究会活動状況と，後援等を行った事業について報告した．また，平成 23 年度の行事予定として，以下 3 件の予定を紹介した．

4 月 16 日	応用生態工学会 福岡 「遠賀川中島自然再生研究会（仮称）設立・現地見学会」（遠賀川河川事務所）
5 月 19～20 日	普及・連携委員会主催 第 3 回フィールド・シンポジウム in 広島 「デルタ域の自然再生における流域的課題～太田川－広島湾流域圏～」（広島市内）
6 月 8 日	国際交流委員会・応用生態工学会 東京 「Klement Tockner（河川生態学），Michael Monaghan（IGB，遺伝生態学），渡辺幸三（IGB，遺伝生態学）等による国際シンポジウム企画」，（東京工業大学）

4) 平成 22 年度決算見込み

2011 年 1 月 11 日現在の収支と，過年度の入金状況（2010 年 1 月 12 日～3 月 31 日）を踏まえた決算予測では，現時点で予算より約 9 万円の赤字超過（335 万円の赤字収支）となっているものの，未集計である各地域活動収入・助成金収入等の計上により，予算内の赤字に収まる可能性が高いことを報告した．

(3) 科学研究費補助金「系・分野・分科・細目表」報告

(独)日本学術振興会の「科学研究費補助金（系・分野・分科・細目表）に関する意見募集」後の動きとして，環境分野の分科・細目を拡充する方向で検討がなされているようであることから，引き続き，工学系からも補助金を申請しやすい細目・キーワードに関する提案・意見を積極的に発信していくことについて，承認・賛同を得た．

(4) 河川生態学術研究会からの技術援助要請について

2011 年 2 月 2 日付けで，河川生態学術研究会より技術援助の要請があった．要請内容は，「河川生態学術研究委員会等へのアドバイザー（仮称）の派遣」，「研究発表会の開催」であり，理事会の承認を得て，技術援助委員会が対応していくこととなった．

2 審議事項

(1) 年度途中入会者の初年度会費減額について

会員の増加・入会促進を目指して「大会後に入会した正会員は，当該年度会費は半額（2,500 円）とすること」について幹事会より提案し，併せて会費に関する規約細則の改定案を提示した．

審議の結果，幹事会(案)は，2011 年度より実施する事で承認され，2012 年度からの更なる入会促進策（初年度会費を半額にする，会員からの紹介で初年度会費を半額にする等）について

幹事会で検討し，理事会に諮ることとなった．なお，2011 年度の大会後入会者は，初年度会費が半額であることから既に発行した会誌・ニュースレターは送付しないこと，初年度会費の半額は 2010 年度入会者に適用しないことが確認された．

また，会費に関わる規約細則の「賛助会員の入会金（200,000 円）」については，学会発足当初に活動するための収入として重要であったが，現在では賛助会員の入会の妨げとなることから，入会金自体を廃止することを決定した．

規約細則

（会　費）

第４条　本会の会費については，平成 **23** 年度以降次の通りとする．ただし，**正会員が当該年度全国大会後に入会する場合は当該年度会費を半額とする．**~~賛助会員の入会金については，理事会で審議し，これによらないことがある．~~

1　正会員　年額　5,000 円
2　学生会員　年額　2,000 円
3　賛助会員　年額　100,000 円（1口以上）
~~入会金　200,000 円（賛助会員のみ）~~
4　名誉会員は，会費を免除する．

(2)　中期計画に基づく検討事項について

1)　中期計画 前文について

第 54 回理事会意見を踏まえ，第 3 次中期計画の前文に発足趣意書を元とした「学会目標」を追記した案を理事会に諮り，承認を得た．中期計画全文は，情報サービス委員会に依頼し，学会ホームページに掲載する．

2)　収入増方策・新規収入源の確保

①　講習会テキスト等の刊行・販売

「応用生態工学に関するテキスト（大学～社会人・実務者レベル）」の作成に向けて，将来構想委員会による「会員向けアンケート(案)」を理事会に諮った．アンケート(案)は，以下の指摘を踏まえて修正し，ニュースレター51 号（2 月発行）に同封し，ホームページ上の入力フォーマットからの回答を主体として，その結果をテキスト刊行に役立てていくこととなった．

②　会費の値上げ・新規区分に関する対応

今後，学会の収入減少が進み，支出抑制のための施策を実施しても学会活動維持のため会費を値上せざるを得なくなった場合には，値上げの理由と値上げ回避のために実施した対策等をしっかりと会員に説明し理解を求めていくという幹事会方針について，理事会の承認を得た．

なお理事会では，以下のような意見・議論があった．

・会費値上げの際は，正会員の会費増で対応し，学生会員会費は変更しない．
・これまでの大会時の研究発表では，学生は非会員でも主たる発表者となれたが，今後，学生会員数の増加を目指して学生会員であることを条件付ける．
・フェロー会員は，会員数が多くないと位置づけしにくいため，設立 20 年・30 年などの節目にその新設の可否について検討する．
・会誌の魅力化を図るため，幹事会で会誌の性格・方向性について議論した上で，会誌編集委員長・副編集委員長等と，会誌にソフトな内容を追加していくのか，別途広報誌等を発刊するのか検討し，理事会に諮るものとする．

③　公益法人の一般財団化による社会還元

幹事会での議論の結果，公益法人の一般財団化による社会還元について，当学会との連携の可能性を検討していくため，賛助会員である財団法人に情報提供・協力を依頼していくことについて報告した．

理事会からは，当学会を一般社団法人（学会・非営利）として登録することはそれほど時間をかけずに可能であることから，組織形態・手続きについて確認し，検討を進めていくこととの意見があった．

3)　事務局作業の軽減

幹事会での討議の結果，「事務局作業の軽減を図るため，委員会関係事務（委員会日程調整，議事次第・委員会資料作成，会場手配・設営，

議事録作成）は，各委員会で実施する方針とする」ことについて，理事会の承認を得た.

さらに以下の項目についても，委員会で担当したり，事務の軽減を図る措置をとるよう意見があり，対応していくこととなった.

・全国大会は実行委員会形式とし，大会開催地のメンバーで構成するよう，委員を任命・依頼する．今後，全国大会実施に関するマニュアルを蓄積し，活用していく.

・全国大会時の公開シンポジウムに関わる「河川整備基金の申請・実施後の報告書作成」は，大会実行委員会で作成すること.

・役員会・委員会に関わる旅費の支給は，振込による事後精算方式へと変更し，それに伴う事務処理について検討していく.

(3) 次期役員の選出方法について

2011 年度は役員改選年であり，次期役員募集・推薦委員会を設置し，6 月に次期役員の募集を行う必要がある．次期役員募集・推薦委員会規程に基づく「理事会による委員長・委員の指名」と「第 8 期役員選出までのスケジュール」について審議を行った.

1) 委員長（1 名），委員（2 名以上）の指名について

2011 年度の次期役員募集・推薦委員会メンバーとして，2009 年度の委員会メンバーが推薦された．事務局から委員委嘱の手続きを進め，最終的に会長が調整・決定することで了承された.

2) 次期役員の募集・推薦スケジュールと役員会開催時期について

2009 年度の改選手順と委員会規程を踏まえ，以下の募集・推薦スケジュールが承認された.

次期役員の募集・推薦スケジュール

4 月～ 5 月上旬	第 1 回 次期役員募集・推薦委員会 スケジュール・公選の手順・公募文確認，推薦候補者一次リスト確認
5 月中旬	幹事会・理事会（メール会議） 推薦委員会報告，スケジュールの承認
6 月 1～ 30 日	第 8 期役員の募集
7 月上～ 中旬	第 2 回 次期役員募集・推薦委員会 次期役員応募状況，候補者の推薦，役員候補者(案)の作成
7 月中旬～ 8 月上旬	幹事会・理事会（会議） 役員候補者(案)の確認，総会資料(案)の審議
8 月下旬～ 9 月中旬	幹事会・理事会（メール会議） 総会資料(案)の承認

第 46 回幹事会

・日時：平成 23 年 1 月 13 日（木）　10:00～12:00
・場所：弘済会館　4 階梅（中）会議室
・出席：藤田幹事長，西副幹事長，浅見幹事，東幹事，五味幹事，河口幹事，山本幹事，安田幹事　仮谷事務局長，高橋眞彦次長

1 報告事項

（第 55 回 理事会報告をご参照ください）

2 検討事項

(1) 年度途中入会における会費減額について

応用生態工学会 北陸地域(新潟，富山，金沢，福井）の責任者，および玉井理事より，「会員増強の強化年（例えば，2011 年 1 月から同年 12 月）に限り，入会の初年度の会費は当該会計年度残余の月数の割合を乗じたものとするなど減額してはどうか」との提案があった.

幹事会での討議の結果，月数割合にすると事務局事務が繁雑となること，大会開催が概ね半期（9～10 月）に開催され，正会員と非会員で大会参加費に差をつけて入会促進を図っていることなどから，大会後入会者が大会時入会者より優遇を受けないよう配慮することを原則とし，幹事会(案)を設定した.

幹事会(案)：大会後に入会した正会員は，当該年度会費は半額（2,500 円）とする

会費に関わる規約細則は，理事会の決議により改正できることから，幹事会(案)を元に，事

務局と玉井理事で調整し，最終案を次回理事会に諮ることとなった.

大会参加者（非・正会員）の受付時支払額

入会時期	大会参加料	正会員費	受付支払額
大会前（正）	6,000 円	納付済み	**6,000 円**
ー（非会員）	10,000 円	ー	**10,000 円**
大会時（非→正）	6,000 円	5,000 円	**11,000 円**
大会後（非→正）	10,000 円	2,500 円	**12,500 円**

(2) 第 3 次中期計画・アクションプランについて

1) 中期計画 前文について

中期計画の前文は, 学会が長期的に目指していく方向や目標等を追記した前文(案)を事務局が作成し，幹事・将来構想委員長が確認した上で, 次回の理事会に諮るものとする.

2) 収入増方策・新規収入源の確保

① 会費収入に関する事項

会費収入に関する事項については, 幹事会で検討した以下の観点を理事会に諮り, 会費値上げの必要が生じた際に, 会員に向けて発信する.

- 会員に対して, 会費の値上げ許容幅を確認することはせず, 会費値上げの必要性が生じた場合に, 事務局経費を正常化するため等の理由や, 支出削減に向け実施した対策等をしっかりと説明して理解を求めたほうがよい.
- 会費値上げの際は, 正会員の会費増で対応し, 学生会員会費は変更しないほうがよい.
- これまでの大会時の研究発表では, 学生は非会員でも主たる発表者となれたが，今後，発表者は会員であることを条件付けた方がよい.
- 会員の新規区分（フェロー会員等）を設定する場合には，別途，その在り方について検討を行い設定していくこととする.
- 事務局は，他学会の年会費・会員サービスについて確認し，整理すること.

② 講習会テキスト等の刊行・販売に向けて

- 会員向けアンケートでは, 取り上げて欲しい分野や専門等のニーズの開拓・確認の他，テキストに使えそうな材料やコンテンツを保有しているか, あるいは他の情報があるかどうか, 学会テキストとして出版すれば工学と生態学の両分野に発信していけることに魅力を感じるか等の質問を作成し, 会員に確認する.
- ニーズのある企画や分野毎の講座をシリーズ化していけば, そのテキストが蓄積される. 将来的に，それらを合本・編集すれば，あまり労力をかけることなく刊行物の発刊が可能である.
- これまでに当学会で開催してきた講演会やワークショップ等の中から, 共通のテーマの発表資料を集め，それぞれの発表者に加筆・編集してもらえれば, 現時点での共通テーマのテキストとなる.
- 農業土木学会では, 会誌の中で魅力的な事例を取り上げ紹介している. 当学会の査読を得た論文による会誌も，相紙を入れて 2 部体制にするなど工夫すれば, 魅力的な事例や情報を紹介することは可能である. 会誌編集委員会と調整・検討し，会誌の魅力向上を図っていくことも重要である.

③ 公益法人の一般財団化による社会還元

公益法人の一般財団化によって, どのような社会還元が行われ, 当学会がどのように連携していけるのかと言った情報が無い. 場合によっては, 当学会が法人格を取得しなければならなくなる可能性もあるため, 幹事会より，賛助会員の財団法人に情報提供・協力を依頼し, 早急に情報収集・検討を進めていく.

3) 事務局事務内容の軽減

事務局事務の軽減を図るため, 現段階で移行可能である委員会関係事務（委員会日程調

整，議事次第・委員会資料作成，会場手配・設営，議事録作成）は，各委員会で実施する方針とする．

事務局は，委員会作業の実施上の段取りや手順を整理し，次回理事会で承認が得られたら各委員長に依頼を進めていく．

3　海外学会派遣員の募集

国際交流委員会

応用生態工学会・国際交流委員会（五味高志委員長）では，2011 年度の海外学会等への派遣者を募集しています．募集要領の概略は以下の通りです．詳細は，学会ホームページをご確認の上，事務局まで申込下さい（2011 年度助成総額は 15 万円）．

【海外学会等への派遣者募集要領】

(1)　目　的

自然環境と開発の問題については，我が国だけに限らず多くの国々で関心が持たれ，様々な研究と実践的な試みが行われて来ている．応用生態工学を発展させるためには，こうした海外での活動に積極的に係わり参加することによって，情報を得ながら，人的交流を図ることが求められている．

応用生態工学会では，ここに会員から希望者を募り，「派遣研究員」を審査選考して，当該年度に海外で開催される応用生態工学に関連する学会・シンポジウム・国際会議等に派遣し，その内容を全会員に報告するものである．

(2)　選　　考

1）資　格

①応用生態工学会の正・学生会員であること（募集開始時点で会員でなくても，会員となることを条件として応募可能とする．）

②応募時に 35 歳未満であること

2）　派遣研究員の選考

①2011 年度は，学会としての助成総額を 15 万円とし，開催内容・派遣先等を考慮して，派遣研究員数・個別助成費用を決定する．

② 選考にあたっては国際交流委員会において書類審査を行い，候補者を選定した上で理事会において決定する．

③助成費用の支給対象とならなかった場合でも，応募者の資格や開催内容・派遣先を考慮して，費用の助成をしなくても「派遣研究員」として認めることが出来るものとする．ただし，当人は辞退できる．

(3)　申込み申請書：

派遣希望者は，学会ホームページを確認の上，会員番号，氏名，所属，連絡先（〒・住所・TEL・FAX・E-mail），年齢，性別，専門分野，希望派遣学会等（開催会議等の名称，主催者名，開催月日，開催国・地名，会議等の目的・内容，現地見学会有無と内容，参加申し込み期限，参加費，研究発表を行うか否か，案内パンフ等がありましたらそのコピーをお送り下さい），および派遣希望理由（選考基準参照のこと）を，A4 二枚以内（書式自由）にまとめ，郵送・FAX・E-mail 等にて事務局に申し込み下さい．

(4)　申込期限：2011 年 4 月 22 日(金)　事務局必着

(5)　派遣決定時期：2011 年 5 月上旬（予定）

※詳細は，学会ホームページをご確認ください

http://www.ecesj.com/J/index.html

2011 年度　海外派遣先情報一覧

①会議名称	North American Benthological Society 2011 Annual Meeting
開催期間	2011 年 5 月 22 日～26 日
開催地	Rphde island, USA
詳細情報	http://www.benthos.org/Annual-Meeting.aspx
②会議名称	2nd IWA Symposium on Lake and Reservoir Management: Sustainable Approaches to Enhance Water Quality
開催期間	2011 年 6 月 13 日～17 日
開催地	Granada, Spain
詳細情報	http://www.iwahq.org/Home/Events/IWA_events/Event_listing/2011/Lake_Management_2011/
③会議名称	96th Ecological Society of America Annual Meeting
開催期間	2011 年 8 月 7 日～12 日
開催地	Austin, TX, USA
詳細情報	http://www.esa.org/meetings/
④会議名称	2nd Biennial Symposium of the International Society for River Science (ISRS)
開催期間	2011 年 8 月 8 日～12 日
開催地	Berlin, Germany
詳細情報	http://www.isrs2011.igb-berlin.de/
⑤会議名称	4th World Conference on Ecological Restoration
開催期間	2011 年 8 月 21 日～8 月 25 日
開催地	Mixico
詳細情報	http://www.ser2011.org/en/
⑥会議名称	American Fisheries Society, 141st Annual meeting
開催期間	2011 年 9 月 4 日～9 日
開催地	Seattle, WA, USA
詳細情報	http://www.fisheries.org/afs2011/prog.php
⑦会議名称	The 12th International Specialized Conference on Watershed & River Basin Management
開催期間	2011 年 9 月 14 日～16 日
開催地	Recife, Brazil
詳細情報	http://iwa2011recife.wordpress.com/
⑧会議名称	American Geophysical Meeting
開催期間	2011 年 12 月 5 日～9 日
開催地	San Francisco, CA, USA
詳細情報	http://www.agu.org/

4　行事開催報告

4.1　マングローブ・河口干潟の保全とその技術に関するフィールドシンポジウム・億首川報告

応用生態工学会　那覇
宮良 工（(財)沖縄県環境科学センター）

応用生態工学会・那覇では，全国規模行事ではありませんが「マングローブ・河口干潟の保全とその技術に関するフィールドシンポジウム・億首（おくくび）川」と題して，上流数百ｍで億首ダム（多目的）を建設中の億首川マングローブを題材に，保全のための技術的課題と地域における監視ネットワークづくりの視点で平成21年8月20日（金）～21日（土）の2日間，フィールドシンポジウムを開催しました．今回のイベントは，(財)沖縄県環境科学センターとの共催とし，参加費は無料としました．

現地観察会参加者は44名，シンポジウム参加者は60名でした．

＜現地観察会＞

現地観察会はシンポジウムに先立ち，平成 21 年 11 月 20 日（金）10 時より億首川（水道専用金（きん）武ダム有り）→大浦川（ダム無し）→漢那福地川（漢那ダム周辺環境整備における人工植栽マングローブ）→億首ダム建設現場の行程で行いました．現地観察会では主にダムの有無によるマングローブ林内の河床材料の違い，ヒルギ類の樹勢，底質と底生動物相の関係などを観察し，現地で議論しました．

億首川マングローブ林内に整備された
観察デッキ上での議論の様子

＜シンポジウム＞

シンポジウムは現地観察会の結果を受けて平成21 年 8 月 21 日（土）10 時より金武町ネイチャーみらい館を会場に開催されました.

開催にあたっては，今回のテーマとしたマングローブの現状理解とその保全技術に関するシンポジウムの趣旨説明が(財)沖縄県環境科学センター理事会副会長福村圭介氏よりなされました.

続いて次の 6 つの講演は，マングローブ林の成立条件，水産資源としてのマングローブ，億首川マングローブの観光・教育上の重要性，ダム建設との関係と土砂動態計算モデルによる将来予測などを一般論から個別の技術論までを網羅する内容でした．個別の講演内容は以下の通りです.

講演① 元琉球大学農学部教授・（社）沖縄国際マグローブ協会・会長 中須賀常雄氏「マングローブ林の成立条件と億首川のマングローブ」

マングローブの定義，沖縄県内マングローブ林（裏内川，億首川，慶佐次川，漫湖等）の現状と更新・成長事例の紹介，マングローブ林の水除林としての機能，海外のマングローブ林との性質・規模の違いなどについてご講演いただきました.

講演② 琉球大学名誉教授･リュウキュウアユを蘇生させる会会長 諸喜田茂充氏「マングローブ林の水産上の役割と億首川のマングローブ」

日本・海外マングローブ林の水産動物相とその分布様式，汽水域の生物トランジット・保育場所としての機能の重要性，底生動物（甲殻類・巻貝類）によるリター破砕とこれによる栄養塩類循環の重要性，魚付林としての重要性などについてご講演いただきました.

講演③ 金武町ネイチャーみらい館館長 外間慎仁氏「億首川のマングローブ林と地域のみらい」

金武町観光振興の将来像，地域シンボルとしての億首川の観光利用の原点と現状，拠点としてのネイチャーみらい館の重要性，地域住民の民意としての億首川マングローブ林モニタリング・保全などについてご講演いただきました.

講演④ 九州大大学院工学府 大槻順朗氏「干潟による河口水温の保全とその効果」

奄美大島の干潟面積の異なる2河川における吸熱効果の違いの実証，低温河川水が湾奥に貯留されることによる水温低下効果の増幅，リュウキュウアユ稚魚生育にとっての冬季湾内低水温の重要性などについてご講演いただきました.

講演⑤ 沖縄総合事務局北部ダム事務所環境課課長 鍵田和彦氏「億首ダム下流のマングローブ林の保全対策の検討について」

億首ダム下流域におけるマングローブの経年的変遷と沿岸漂砂等変化予測結果の紹介，億首川マングローブ林の下流側へ分布範囲の拡大傾向，保全対策としての塩分濃度保全のための正常流量の設定，今後のモニタリング計画などについてご講演いただきました.

講演⑥ 徳島大学大学院先端技術科学教育部 竹村紫苑氏「億首川マングローブ林の位置づけと土砂動態・物質輸送」

広域的視点からのマングローブ林生育適地の把握と生育適地，ダム有無条件下河川におけるマングローブ林内空間・森林構造変化と流路河床断面形状の把握，広域的視点からのマングローブ林生育適地の把握と生育適地，Ric-Nays（河床変動計算モデル）を用いた土砂動態解析結果などについてご講演いただきました.

講演のようす

全講演終了後，ダム建設による影響が懸念される億首川マングローブの保全技術と地域を中心としたモニタリング体制，研究者・行政の支援などに関して，鎌田磨人徳島大学大学院ソシオテクノサイエン

ス研究部教授をコーディネーターとして，中須賀常雄元琉球大学教授，赤松良久山口大学大学院理工学研究科准教授，神谷大介琉球大学工学部助教，宮良工(財)沖縄県環境科学センター総合環境研究所長によるパネルディスカッションが行なわれ，結語として地元を主体として，研究者，行政の役割分担のもと維持管理モニタリングを行うことを確認しました．議論の概要は次の通りです．

1) 鎌田磨人教授

- 生態系保全・自然再生の枠組み（再生優先順位決定の方法・再生目標に応じた計画立案の方法・地域住民を中心とした事業主体と仕組み）に関する提案．
- マングローブの変化指標による地域住民・行政・研究者が分担したモニタリングの提案．

2) 中須賀常雄元教授

- 小規模化し本来の生態系サービスを得られなくなっている沖縄島のマグローブ．億首川でも老化しているので若返らせることが必要との指摘．
- 億首川下流側におけるマングローブ更新立地の可能性指摘．
- 流域全体から考えるマングローブ再生の提案．
- 河川管理者ではなく，マングローブ管理者を決める必要性の指摘．また，次世代の管理者育成のための環境教育の重要性指摘．

3) 赤松良久准教授

- 流域システム（土砂動態，物質循環等）を把握した上でのマグローブ維持管理の重要性指摘．
- その上で，ダム運用後における流域流下土砂・海砂のバランスとマングローブの関係把握などの重要性指摘．
- 地域住民と役割分担したモニタリングの重要性指摘．

4) 神谷大介助教

- 地域環境資源の価値を認識することの重要性指摘．
- 地域コミュニケーションを形成し拠点となりうるネイチャーみらい館の重要性指摘．
- 将来のあるべき姿を想定した維持管理計画の立案・モニタリングの重要性指摘．

5) 宮良工所長

- 沖縄における水産業・観光発展のための河口干潟・マングローブ再生の重要性指摘．
- ダム運用後における洪水発生頻度・流量の低下によるマングローブ更新立地増加の可能性指摘．
- 地元環境管理型億首川モデル発信の提案．

パネルディスカッションのようす

＜謝辞＞

今回のシンポジウム開催にあたり，シンポジウム会場・懇親会会場・宿泊施設を割安で提供していただいた金武町ネイチャーみらい館外間館長，開催費用の多くの部分を負担していただいた(財)沖縄県環境科学センター，県外から自費でご参加いただいた学会員各位，現地観察会において移動用マイクロバスを快く出していただくとともに，講演を行っていただいた沖縄総合事務局北部ダム事務所，快く後援していただいた沖縄総合事務局開発建設部，沖縄県土木建築部河川課，金武町，(社)沖縄建設弘済会，リュウキュウアユを蘇生させる会の皆様の他，準備・運営にご協力いただきました応用生態工学会会員等の皆様に厚く御礼申し上げます．

4.2　第３回　近畿現地ワークショップ in 淀川
～淀川ワンド群の取組の歴史と課題～

応用生態工学会　大阪
池田欣子（アジア航測㈱）

応用生態工学会大阪では，平成22年10月15日（金）～16日（土）の2日間にわたり，第3回近畿現地ワークショップを開催しましたので，その開催概要を報告します．

近畿現地ワークショップでは河川の上流域から回を追うごとに下流へと視点を移動させています．今回は下流域～中流域に視点を置き，近畿地方を代表する河川である淀川（幹川延長約75 km，流域面積約8,240km²）の下流域～中流域に整備されたワンド群等の河川環境上の課題と取組について議論しようという試みでワークショップを開催しました．

ワークショップの参加者は，部分参加を含めて75名でした．

＜現地見学（１日目）＞

1 日目の現地見学では，ＪＲ京都駅からバスで出発し，淀川上流の支川木津川の流れ橋周辺に整備された水制工，淀川の楠葉ワンドを見学した後，水上バスに乗船し大阪市内までの約 15km を下りました．参加者は 52 名でした．

整備された水制工とたまり

まず，木津川流れ橋（木津川 6k 付近）の水制工に向かいました．

水制工は高水敷化した河床を切り下げ，多様な河床環境を復元するために整備されたものです．水制工の周囲には小さなタマリが形成されており，木津川タマリ群の形成過程の一端を目撃したようでした．

その後，淀川の楠葉ワンド（淀川 33k 付近）に移動し，ワンドを見学しながらワンドの再生事業等について説明をうかがいました．淀川では砂利採取が盛んであったことなどから，河床低下が進行して水陸移行帯（エコトーン）が減少し，現在では水陸移行帯の延長はかつての四分の一以下に減少したということです．淀川河川事務所では水陸移行帯が生物の生息に重要であると認識し，その解決策としてワンドやタマリを新たに創出しつつあるということでした．現地見学を行なったワンドも高水敷を切り下げて創出されたワンドでした．

楠葉ワンドにて，淀川河川事務所より取組の説明

淀川河川事務所へ移動し，昼食は淀川の堤防上でいただきました．昼食後には淀川に隣接した淀川資料館で淀川の歴史的変遷や生息する生物の展示を見学し，淀川に関する理解を深めました．

点野（淀川 21k 付近）から水上バスに乗船して三十石船の船着場であった大阪市内の天満橋までの約 15km を下りました．水上バスでは川の中から水際の状況が観察でき，貴重な体験ができました．また，毛馬閘門を船で通過するのは，参加者の殆どが初めての体験だったらしく，多くの人が閘門の開閉作業を撮影していました．大阪市内に入ると，砂利運搬船が停泊しており，楠葉ワンドでの説明を想起しました．

＜講演（２日目）＞

講演は淀川の城北ワンドが眼下に望める大阪工業大学で開催されました．ポスター発表４編とパネルディスカッションで構成されました．さらに，１日目の現地見学で参加者が印象に残ったことについて

各自写真を撮影してもらい，一言コメントを添えて提出していただき，それを会場に展示し，各参加者と現地の課題などを共有することを試みました．参加者は 59 名でした．

開催にあたっては，大阪府立大学の谷田一三教授から講演の趣旨説明をしていただきました．

会場からみた城北ワンドの様子

谷田教授による趣旨説明

参加者による現地見学の写真を掲示

＜ポスター発表＞

ポスター発表①

「淀川における外来水草対策とその効果について」

八千代エンジニヤリング㈱ 魚留卓

淀川で大量に繁茂し，駆除に膨大な労力がかかっていたボタンウキクサの駆除方策についての発表．

ボタンウキクサが繁茂し始める前からの早期駆除および発生源での徹底的な駆除を行うことによって，淀川水系での駆除に大きく進展があったということを報告いただきました．ただし，ボタンウキクサの埋土種子は数年間発芽可能であるため，予断は許さないそうです．

ポスター発表②

「淀川河川環境と淡水性ウズムシ類の分布関係－淀川水系における市民参加型調査の結果から－」

大阪市立自然史博物館　石田　惣

水質の指標種とされるウズムシ類の要求する生息環境条件の特徴についての発表．

在来のウズムシ類は良好な水質の指標とされていますが，具体的な環境要求を野外で定量的に解析した例は殆どないまま近年の河川環境の変化や，外来のウズムシ類が侵入していることに危機感を抱かれて調査を開始されたということです．

調査の結果から推察された，在来種であるナミウズムシおよび外来種であるアメリカナミウズムシのそれぞれの要求環境を報告していただきました．なお，本プロジェクトは市民参加で実施され，173 名の市民が登録・調査されているそうです．

ポスター発表③

「城北ワンド群の人工的環境改善」

大阪工業大学　岩崎　洋

城北ワンド群でのワンドの増設と増設したワンドでの改善策に関わるモニタリング状況の発表．

増設したワンドの環境が劣化したため，水草の除去など改善対策が行われました．その対策の効果を把握するため，魚類の分布および産卵・仔魚調査を実施し，既存のワンドより改善策を行なったワンドで産卵規模や仔稚魚の確認が多いという結果が得られたと報告していただきました．

ポスター発表④

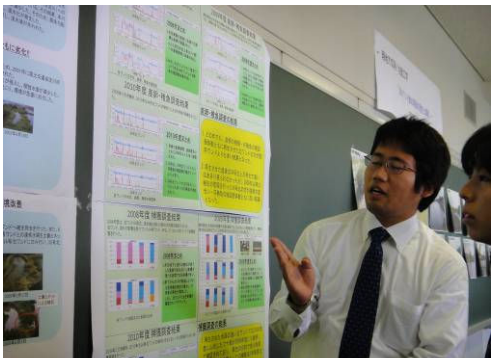
「淀川におけるイタセンパラ生息水域の水理学的特性」

大阪工業大学　野地　貴弘

イタセンパラの主要な生息水域であった城北ワンド群，赤川ワンド・タマリ群の 70 年代と現在の洪水時の攪乱状況の変化に関する数値実験結果の発表．

摩擦速度の分布および移動限界粒径を求め，水理環境を推定した結果，大規模な出水では 70 年代と

同等の攪乱が発生すると推定されたものの，70 年代に生じていた年最大流量 2,000m³/s 程度以下の中・小規模な出水による攪乱は減少したことが判明したと報告いただきました．



ポスターセッションの様子

＜基調講演＞

「淀川の水環境の歴史と現状」

大阪市立大桐中学校　河合典彦

舟運の航路確保のために整備された水制工が期せずしてワンドやタマリといった淀川の豊かな水環境の形成に貢献し，淀川はイタセンパラやアユモドキ等の多様な水生生物が生息する河川となっていたこと，河川改修事業による冠水頻度の低下など環境の変化や外来魚類の増殖等によって，その環境は劣化し，在来種の水生生物も減少していることについて紹介がありました．

そして，劣化したワンド等の環境を改善する取組が紹介され，次世代に淀川の良好な環境をどのように残していくべきかと，問題提起がありました．

＜パネルディスカッション＞

話題提供①

「淀川ワンド群の取組の歴史と課題」

大阪工業大学　綾　史郎

淀川や淀川のワンド群の環境の劣化や水生生物の減少の要因は河川改修，高水敷の公園利用，利水，および外来種の異常繁殖にあると指摘されました．また，淀川の生態系を復元するための方策として，ワンドの増設や河床低下を緩和するための流砂量の改善等を提示していただきました．また，このような取組を推進するためには市民の十分な理解と協力が必要不可欠であり，今後はいかに市民の協力を得ながら，復元策を実行していくかが課題であると問題提起がありました．

話題提供②

「河川行政，河川管理からの課題」

淀川河川事務所　森川一郎

淀川における改修工事など治水事業や利水事業および淀川ワンド群での環境改善やイタセンパラの野生復帰の取組について紹介がありました．今後も淀川水系の生態系の改善を目指し，今までの取組の成果を踏まえつつ，ワンドの増設，縦断的連続性の改善等の保全・再生を実施していくという方針が紹介されました．また，新たな課題として，公園等の利用と環境保全の両立等に関して地域住民の理解を得ることや，人手をできるだけかけない維持管理手法を検討することが提示されました．

話題提供③

「流域の土砂管理の観点からの課題」

京都大学防災研究所　角　哲也

淀川の川砂はビーチバレー世界大会に使用されるほど良質で高級だそうです．しかし，現在の淀川の河床は木津川から供給される土砂のみで成り立っており，このままでは，比較的近い将来に河川環境の劣化が懸念されると指摘がありました．淀川水系の河川環境の保全および砂資源の保全のため，ダムからの土砂供給を早急に検討すべきと指摘されました．

話題提供④

「流域の自然環境の観点からの課題」

京都大学防災研究所　竹門　康弘

自然環境の観点からの課題として，流域の自然環境保全のために下流で必要な対策，淀川ワンド群保全のために必要な流域スケールの対策，流域生態系の統合的管理の必要性の３点があげられました．さらに，これら課題の具体的な対策として，縦断的連続性確保のための淀川大堰や毛馬閘門の水位操作の必要性等を紹介されました．また，これらの生態系を保全するための各事業については，各々を関連づけ，統合的な管理が必要であると提言をいただきました．

話題提供⑤

「河川地形の観点からの課題」

京都大学防災研究所　中川　一

淀川水系ではダムによる流砂の遮断や洪水調節によって川のダイナミズムが減少し，環境や生態系の多様性が低下していることから，水制工を新たに配置することによる，多様性のある河川環境の創出・復元案が提示されました．１日目に見学した木津川の水制工はこの実践例であり，水制工周辺での河床地形や粒度分布，縦横断形状の多様性創出，砂州のダイナミズム回復について紹介していただきました．

話題提供⑥

「冠水域と攪乱域の再生」

大阪市立大桐中学校　河合典彦

淀川のワンドについては，今までの取組によって外来種の侵入や水草等の繁茂など幾つかの把握された課題について紹介がありました．その課題を解決するための実験的取組について，赤川ワンドの事例等を紹介していただきました．

話題提供⑦

「地域ぐるみの外来種対策と課題」

大阪府環境農林水産研究所　上原　一彦

淀川ではイタセンパラの野生復帰など生物多様性への取組は進んでいるものの，地域住民の関与が少ないことが課題であり，地域住民による保全活動を根付かせるための方策について紹介をいただきました．その事例として，イタセンパラをシンボルとした城北ワンドでの外来種駆除など保全活動について紹介していただきました．

＜総合討論＞

上述の話題提供について，会場から質疑をうけました．その後，総合討論は今回のワークショップのテーマである「淀川ワンド群の取組の歴史と課題」をテーマに，淀川水系の河川環境の保全・再生について討論が行なわれました．

淀川水系では，氾濫原を代表する水生生物であるイタセンパラをシンボルとして河川環境の再生を検討することが提案されました．河川環境の再生のためには，中小規模の出水による冠水頻度の改善や河床低下が顕著な場所での土砂管理方策，いかに地域住民と協力できるかが話し合われました．

イタセンパラが淀川水系で確認されなくなり数年経過している状況であり，淀川の環境保全を討議されるパネラーからは，淀川での取組への意気込みと厳しさを感じました．

おわりに

今回のワークショップは「淀川のワンド群の取り組みの歴史と課題」のテーマでしたが，まさにテーマに沿って，人との関りのなかで淀川がどのように変化してきたか，また淀川やワンドの保全・再生の取組の歴史と，そこから得られた知見・課題によって今後どのように取組んでいくのかという議論が展開されました．生態，水理，土砂管理，市民参加など様々な観点からの議論があり，淀川だけでなく河川の様々な課題を総合的に考える機会になったのではないかと思います．

参加者全員で（木津川流れ橋にて）

＜謝辞＞

今回のワークショップ開催にあたり，準備段階からご指導，情報提供をいただき，現地案内や事例紹介などご協力いただきました国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所，パネルディスカッションの会場を提供いただいた大阪工業大学，ならびに準備・運営にご協力いただきました会員の皆様に厚く御礼申し上げます．

4.3　応用生態工学会福岡 2010－九州の応用生態工学の事例と研究－　事例発表会

応用生態工学会　福岡
原田圭助（西日本技術開発㈱）

応用生態工学会福岡では，2007年以来となる九州地区事例発表会を12月8日に福岡市で開催いたしました.

＜開催内容＞

日時：2010年12月8日　10:30～17:30
　　17:30～懇親会
場所：九州大学西新プラザ（福岡市早良区）
発表方法：口頭発表のみ
参加費：発表者及び学生：無料
　　会員：¥1,000（学生以外）
　　非会員：¥2,000（学生以外）
　　懇親会費：¥3,000

＜プログラム＞

●10:40～12:00　セッション１（環境要因に対する生物の応答）

・純淡水魚類の流程分布とセグメント区分－九大水実・河川魚類相ＤＢを使った分布解析事例：○鬼倉徳雄（九大院農）・中島淳（福岡保環研）

・汽水性ハゼ類の分布を数値地図データから予測する－キセルハゼ（絶滅危惧ⅠA類）の水系スケールでの分布を規定する環境条件について－：○乾隆帝（九州大学農学研究院）・江口勝久（佐賀県玄海水産振興センター）・中島淳（福岡県保健環境研究所）・鬼倉徳雄（九州大学農学研究院）

・山附川における河道内植生と物理環境の関係：○劉義濤，的野直矢，島谷幸宏（九州大学大学院工学研究院環境都市部門）

・生息環境評価におけるモデルの複雑性と再現性に関する一考察　―ファジィ生息場選好性モデルを例にして―：○福田 信二（九州大学熱帯農学研究センター），Bernard De Baets（ゲント大学バイオサイエンス工学部），鬼倉徳雄（九州大学大学院農学研究院），中島淳（福岡県保健環境研究所），向井貴彦（岐阜大学地域科学部）

●13:00～14:20　セッション２（海域～汽水域）

・北川感潮域における河床材料の違いによるカニ類の生息状況について：○坂井智美，伊豫岡宏樹，皆川朋子，渡辺亮一，山崎惟義（福岡大学工学部社会デザイン工学科）

・五ヶ瀬川水系五ヶ瀬川および北川感潮域におけるカニ類の生息環境：○伊豫岡宏樹（福岡大学工学部社会デザイン工学科），楠田哲也（北九州市立大学国際環境工学研究科），島谷幸宏（九州大学大学院工学研究院），渡辺亮一，皆川朋子（福岡大学工学部社会デザイン工学科）

・海岸護岸におけるオカガニ等の移動分断対策：○福島 新，黒崎靖介，冨坂峰人，御前雅嗣（日本工営株式会社）

・河口域の人為改変に伴う水温環境の変化：○大槻順朗（九州大学大学院工学府都市環境システム工学専攻，日本学術振興会特別研究員），島谷幸宏（九州大学大学院工学研究院環境都市部門）

●14:30～15:30　セッション３（生息環境の創出）

・代替横坑におけるコキクガシラコウモリ（Rhinolophus　cornutus）の生息環境の創出：○山本史子，中嶋雅孝（財団法人九州環境管理協会），中川順野（福岡県伊良原ダム建設事務所），荒井秋晴（九州歯科大学総合教育学分野）

・裂田溝における護岸改修工事が魚類群集に与えた影響と復元工法の提案：○渡辺健一（福岡大学大学院），渡辺亮一，山崎惟義，伊豫岡宏樹，皆川朋子（福岡大学），島谷幸宏（九州大学）

・絶滅危惧種・外来種の二面性を持つ淡水魚ワタカに関する報告～導入先での環境選好性から在来生息地の修復技術を考察する～：○大畑剛史・井原高志・乾隆帝・大浦晴彦（九州大学水産実験所）・中島淳（福岡県保健環境研究所）・鬼倉徳雄（九州大学水産実験所）

●15:40～16:40　セッション４（川づくり・維持管理など）

・「中国太湖の現状とハイブリッド型バイオマニュピレーションの試み」～応用生態工学のグローバル化を目指して～：○井芹寧（西日本技術開発（株））・久場隆広（九州大学工学府）・ハオ愛

民（東アジア環境研究機構）・劉玉賢・岡貴稔（九州大学工学府）・張振家（上海交通大学）

・自然再生事業における市民主体の維持管理体制の構造について：○林博徳，島谷幸宏（九州大学大学院工学研究院環境都市部門），泊耕一（国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所）

・最近の多自然川づくりの動向と応用生態工学的評価：○島谷幸宏（九州大学大学院工学研究院環境都市部門）

●16:50～17:30　総合討論

●終了後　懇親会（西新プラザ内）

＜参加者数・発表会内容＞

参加者は発表者，事務局も含めて52人で，そのうち学生の方が半数以上の28人を占めました．発表会の目的のひとつとして，若い研究者の登竜門としての位置づけがありますので，その目的は達せられたと感じました．

発表は魚類，甲殻類に始まり，ほ乳類やモデル，維持管理にまで及び，大変多岐にわたっていました．フィールドの種類としては，汽水域も含めた河川が最も多く，山地や海域の事例はやや少ない結果でした．

＜発表賞＞

全ての参加者へのアンケートをお願いすることにより，最もわかりやすく，興味深い発表に対して発表賞の表彰を行いました．受賞者・受賞発表は以下の方です．

「絶滅危惧種・外来種の二面性を持つ淡水魚ワタカに関する報告～導入先での環境選好性から在来生息地の修復技術を考察する～」

○大畑剛史・井原高志・乾隆帝・大浦晴彦（九州大学水産実験所）・中島淳（福岡県保健環境研究所）・鬼倉徳雄（九州大学水産実験所）

発表者の大畑さんには，表彰を行うとともに，賞品（懇親会無料招待）が授与されました．

＜総合討論＞

当会理事である九大島谷先生の進行により，発表内容および九州地区での活動に関して討論が行われました．今回のような発表会は，大会が遠方で行われる際には，参加できない学生の発表の場として非常にありがたいという意見を初めてとして，身近に様々なフィールドがあることを知る機会として貴重という意見がありました．その一方で行政側からの参加がない旨の事務局へのご批判もいただきました．開催頻度については，発表会を２年に１回として，発表会のない年には現地見学会を実施するなど，１年に１回の行事を目標としてほしい等の意見が出ました．また発表中に提案があった魚類のＤＢの運営を地区事務局で行ってはどうだという提案もありました．

以上のような意見を踏まえると，コンサルタント一名で運営する今の事務局体制ではやや無理があるのではということになり，今後の地区事務局の運営方法にまで討論が及び，運営側としても大変有意義な総合討論となりました．

＜今後の活動方針＞

総合討論でディスカッションしたことを受けて，来年度から，より多くの方の協力を得て，組織的に地域活動を運営していくことにしています．九州全体でも会員数は100名程度ですので，当面は事務局を選挙等で選ぶことはせず，積極的に参画していただける人を中心に，様々な企画を計画・運営していく予定です．我こそはという意志のある方は，事務局原田までご連絡ください．

＜おわりに＞

2011年１月末の段階で，はっきりしたことはいえないのですが，とある川をフィールドとして，応用生態研究会福岡を主体として，研究を進めるプロジェクトを計画しています．大学，行政，コンサルタントが垣根を取り払って研究を行い，研究の成果を学会に発表するのみでなく，河川管理者や地域の方にも理解してもらえるようなプロジェクトにしていければと思います．息の長い活動になると思いますが，これから大変楽しみです．

これらの活動や地区事務局への参加など，お問い合わせは原田まで（Ｅメール:k-harada@wjec.co.jp）

4.4　活動紹介「多自然川づくり研修会」

川越　幸一（応用生態工学松山）

２０１０年６月から１１月にかけて愛媛県内で開催された「多自然川づくり研修会」の様子をご紹介します．この研修会は東予環境グループと鞍瀬塾という市民活動グループが開催したものです．主催者の鞍瀬塾等のメンバーが応用生態工学松山の「勉強会」に参加し，それに触発され企画された研修会です．そのこともあって，当初から協力させて頂いています．

研修会は，東予地区の鞍瀬川で２回，中予地区の重信川で２回，南予地区の肱川水系やため池で２回の計６回行いました．東予と中予では午前中に座学，午後から現地研修，南予は１日現地研修の形で行いました．参加者は毎回スタッフも含め２０人程度で，その内訳はコンサルタント会社をはじめ，市民団体，行政関係者など多岐にわたり，四国内だけでなく広島や大阪からも参加を頂きました．

座学では，講師に吉村伸一氏をお招きし，多自然川づくりについて分かりやすく写真やビデオを利用して説明して頂きました．また，（財）リバーフロント整備センターの内藤正彦主席研究員には，中小河川における多自然川づくりのポイントを，説明して頂きました．現地研修では愛媛県内の多自然川づくり，ビオトープ，泉の再生など多種の事例を見学しました．

座学と現地研修場所の様子は以下の通りです．

座学の様子

重信川での現地研修（１回目）

重信川での現地研修（２回目）

鞍瀬川での現地研修

鞍瀬川ではゴミの片づけもしました

野村ダム（肱川）での現地研修

ダムの堤体内にも入れました

奥池ビオトープでの現地研修

肱川本川と麓川での現地研修

多自然川づくり研修会は，来年度も今年と同じように，座学と県内事例の現地研修を中心に４回ほど行う予定です．よろしければ是非ご参加下さい．手作り感一杯の研修会ですので気楽に参加して頂けたらと思います．

最後に，この研修会には（財）リバーフロント整備センター，愛媛県，西予市，内子町，国土交通省等のご協力を頂きました．応用生態工学松山として，今後も協力して行きたいと思います．会員の皆様にもご協力をお願いすることもあるかと思います．よろしくお願いをして，締めさせて頂きます．

5　行事予定

5.1　第３回　フィールドシンポジウム　in 広島

デルタ域の自然再生における流域的課題

～　太田川ー広島湾流域圏　～

応用生態工学会　広島

若尾拓志（中電技術コンサルタント(株)）

応用生態工学会では，現場のニーズに応じた研究テーマの発掘等を目的に，全国大会とは別に全国フィールドシンポジウムを開催してきました．

今回（3 回目）は，流域圏のうち「デルタ域」での取り組みに焦点をあてて，都市域における自然の復元や共生に関して，多くの取り組みが行われている広島湾流域圏で行います．

イベントの詳細は検討中です．詳細が決まり次第，ニュースレター，学会ホームページ，メーリングリスト等でご案内いたします．

奮ってご参加ください．

①開催期日（予定）

平成 23 年 5 月 19 日(木)～20 日(金)

19 日：現地見学会，交流会

20 日：講演会（広島市内）

②開催概要（予定）

・現地見学会は，干潟環境や，カキ殻を用いた底質浄化試験の実施箇所を，地元研究者の案内で見学します．

・講演会は，名古屋大学大学院工学科の辻本哲郎先生に基調講演をお願いします．また，地元の研究者に，研究成果を発表して頂きます．

5.2　国際交流シンポジウム

生物多様性を意識した河川環境管理

～COP10 後の日本と欧州での取り組み～

国 際 交 流 委 員 会

応用生態工学会 東京

国際交流委員会と応用生態工学会 東京では，国際交イベントとして，6 月 8 日にシンポジウムを開催します．

招待講演には，第 10 回東京大会の時に講演頂いたクレメント・トクナー氏，同機関からマイケル・モナハン氏，渡辺幸三氏の他，国内研究者による講演も予定しています．また，午前中には学生によるポスターセッションを予定し，発表者についてもこれから募集して参ります．

詳細が決まりましたら，ホームページ，ece-ml でご案内いたしますので，よろしくお願いいたします．

実施時期：　2011 年 6 月 8 日（水）予定

場所・会場：東京都大田区 東京工業大学(予定)

講 演 者：Klement Tockner（IGB，河川生態学）
Michael Monaghan（IGB，遺伝生態学）
渡辺幸三（IGB，遺伝生態学）
国内研究者（河川生態，河川行政等）

実 施 形 態（予定）
午前：学生によるポスターセッション
午後：講演会，パネルディスカッション

キーワード：河川環境管理，生物多様性，遺伝子，COP10，流域保全等

6　今後の予定

12.17	ニュースレター50 号発行
1.13	第 46 回幹事会
2.4	第 55 回理事会
2.18	ニュースレター51 号発行･会費請求
2.25	会誌 13 巻 2 号　発刊
3.31	平成 22 年度（2010 年度）終了
4.1	平成 23 年度（2011 年度）開始
4.16	応用生態工学会 福岡 **「遠賀川中島自然再生研究会（仮称）設立・現地見学会」（遠賀川河川事務所）**
4 月	応用生態工学会誌編集委員会
4 月	金沢大会実行委員会開催（第 3 回，金沢市）
4 月	第 1 回次期役員募集・推薦委員会
5.19～20	**第 3 回フィールドシンポジウム in 広島（広島市内）**
5 月	幹事会・理事会（メール会議）
6.1～30	次期役員 募集期間
6.8(予定)	**国際交流委員会・応用生態工学会 東京** 「Klement Tockner（**河川生態学**），Michael Monaghan（IGB，**遺伝生態学**），**渡辺幸三**（IGB，**遺伝生態学**）**等による国際シンポジウム企画**」，**（東京工業大学）**
6 月	ニュースレター52 号発行（**電子配信**）
7 月	第 2 回次期役員募集・推薦委員会
7 月	幹事会・理事会（会議）
8 月	ニュースレター53 号発行（**電子配信**）
9 月	幹事会・理事会（メール会議）
9.14(水)～17(土)	**第 15 回 金沢大会**
9.14(水)	エクスカーション（石川県内）
9.15(木)・16(金)	研究発表会，分科会，自由集会(金沢学院大学)，懇親会
9.17(土)	総会，公開シンポジウム（県立音楽堂文化交流スクウェア予定）

【学会からのお知らせ】

第 14 回総会決議に基づき，2011 年度は支出抑制予算を組み，ニュースレターの電子配信，役員会開催数の減，旅費の縮減，事務局管理費の縮減等を実施しつつ，より活発な活動による学会活性化を目指して，第 3 次中期計画・アクションプランを実行して参ります．本号に同封しました「年会費納入のお願い」に記載されている会員データベース登録情報のメールアドレスをご確認の上，変更がありましたらホームページの「連絡フォーム」より，事務局にご連絡ください．

●第 3 次中期計画・アクションプラン
http://www.ecesj.com/J/aboutus/3rdmidplan.html

2009 年 4 月より事務局長に就任され，2 年間，大変ご苦労・ご活躍頂いた仮谷さん（株式会社 建設技術研究所）が 3 月末をもって交代されます．2011 年度からは，現在事務局次長を務めて頂いている「高橋眞彦さん（いであ株式会社）」が事務局長に就任されます．仮谷さん，どうもありがとうございました．

『2 年間の短い期間でしたが，各地域で熱心に活動されている会員の皆様を始め，学会活動を無償で支えて頂いている委員会メンバー・役員の方々と共に活動できる機会が得られたことをありがたく，感謝しております．今後も学会事務局のよりスムーズな運営に努め，会員の皆様のサービス向上に資するよう次期事務局長に円滑に引き継ぎを行って参りますので，今後とも会員の皆様からのご支援・ご協力の程，よろしくお願いいたします．』

［平成 22 年 2 月 10 日現在会員数］
名誉会員：　4 名
正会員　：1,163 名
学生会員：　98 名　　合計 1,265 名
賛助会員：　33 法人（49 口）